



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	認知語用論の観点から見る日本語の曖昧表現の意味解釈の過程：関連性理論に基づいて(fulltext)
Author(s)	許,夏玲
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 69(2): 483-489
Issue Date	2018-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/148989
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

認知語用論の観点から見る日本語の曖昧表現の意味解釈の過程

—— 関連性理論に基づいて ——

許 夏 玲*

留学生センター

(2017年9月26日受理)

1. はじめに

日常、我々は何かしらある目的をもってコミュニケーションを行っている。たとえ、相手と挨拶を交わすだけでも実はその発話行為に人間関係を維持していきたいという意図が存在している。また、我々の発話は常に完全文の形で表れることはないし、文字通りの意味を表しているとも限らない。許(2010)で述べられたように、Grice(1989)の提唱した「協調の原理(Cooperative Principle)」^{註1}では、話し手が人と会話を行う際、どのような原則を守ってどのように自分の発話意味を伝えるのかといった話し手側の視点から分析に焦点が当てられている。しかし、聞き手側は話し手の発話意味をどのように解釈しているのか、発話解釈に用いられる推論の過程は何であろうかに関しては明確に説明がなされていない。これに関しては、Sperber & Wilson(1986)の「関連性理論(Relevance Theory)」から説明が得られるのである。

Sperber & Wilson(1986)では、発話意味を2つのモード、すなわち「文の意味」(encoding meaning)「解読の意味」(decoding meaning)と「推論による解釈の意味」(inferential meaning)があるとしている。たとえば、「テレビでなんかやってる？」と聞かれたとき、「ないよ」と返事したとする。「ないよ」という文の意味から更に「ない」=「今」「番組」「ない」+「よ」=「相手の知らないだろうと思うことを知らせる」というふうに解読の意味が得られる。しかし、この段階では聞き手がまだ話し手の発話で言わんとしている意味が十分に解釈できるとは言えない。そこで、聞き手が発話の状況から「テレビが壊れていない」

「テレビ局でストライキをやっていない」「話し手/自分たちの好きな番組のジャンル」などの前提(assumptions)をもとに、推論(inference)を用いて「今、特に(あなた/わたしたちの)見たい番組はやっていないよ」という話し手の発話の本当の意味が解釈できるのである。この推論による解釈の意味は、更に「明意(explicature)」と「暗意(implicature)」の2つに下位分類できる。「明意」とは、発話された言語形式を発展させた形で、言わば発話文の欠けた要素を完全に復元させた形で命題を意図明示的に表出した意味のことである。前述の例で説明すれば、「今、テレビで特に面白い番組をやっていないよ」というのが「明意」である。それに対し、「暗意」は意図非明示的な意味であり、「特に私たちの見たい番組はやっていないよ」という暗示的な意味になる。解釈の過程において、「明意」に加えて、更に発展させれば、「高次明意(higher-level explicature)」が得られるという。前述の発話例から「話し手が今、テレビで特に面白い番組をやっていないよとつまらなさそうに言っている」といった話し手の発話時の態度や判断を示す表現を加えて臨場感を再現すれば、「高次明意」が得られるということである。今井(2012)では、「高次明意」という解釈の手段を用いて、アイロニー、たとえば“What a lovely day for a picnic!”を“*It is ridiculous to believe that it's a lovely day for a picnic!*”のように話者の「命題態度」を表示することで、適当に意味を解釈できるとしている。

しかし、発話解釈の過程における「高次明意」の位置付け、また「明意」「暗意」との相違に関しては更なる考察が必要であると思われる。たとえば、意味確定

* 東京学芸大学 留学生センター (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

不十分なもの (underdeterminacy) を取り除くために4つの語用論的手段があるとされているが、そのうち、「飽和」(saturation) と「自由拡充」(free enrichment) ^{註2} は一見すると、明意のレベルで発話の特定の言語要素による補いかどうかによって分けられるが、意味を確定(発展)させていく過程から見ると同じものと考えられる。

本稿では、日常会話の用例を用いて意味確定不十分な表現、いわゆる曖昧表現を認知語用論の関連性理論の観点から論じ、「明意」「高次明意」「暗意」の互いの関係を明らかにすることを試みる。

2. 意味を確定させるための発展

言葉は概念が託されている一種の記号である。日常のコミュニケーションで用いられる言語表現には、意味の確定度が不十分なものがしばしば見られる。このような意味確定不十分な表現の意味を確定させるために以下のような「発展 (development)」といった4つの語用論的手段が取られる。

2. 1 一義化 (disambiguation)

日本語は曖昧な表現が多いと日本語学習者によく思われている。「曖昧」とは、物事や態度がはっきりしない様子を表す意味である。この曖昧性を生じさせる背景の一つとして、意味の多義性 (ambiguity) が考えられる。意味の多義性は、語彙に限らず、表現やフレーズにも存在している。たとえば、日本語の語彙では、平仮名で表記すると、同音異義語のものが多く、「こうえん」には少なくとも「公園」「講演」「後援」「公演」「好演」などの意味を思い付く。このような同音異義語の場合は、漢字で表記すると意味が固定され、一義化される。その他、表現には「結構です」「大丈夫です」「もう予定を入れちゃったの」などのように、肯定的な意味や字面通りの意味とも解釈できるし、相手への断りといった否定的な意味とも解釈できるものがある。このような意味の曖昧性を解消し、意味を確定させるには、コンテキストに照らし合わせて意味解釈をしなければならない。

2. 2 飽和 (saturation)

代名詞 (彼、彼女、わたし、あなた)、指示詞 (これ、それ、あれ)、時を表す名詞 (今、昨日、さっき) などの直示的表現は、指示対象や範囲が明示されていないため、具体的に何を意味しているか、その指示対象や範囲を固定させる必要がある。飽和とは、ある条

件のもとで、ある物の量が増加しなくなるまで、最大限に達した状態の意味である。たとえば、「彼女は学生だよ」の「彼女」と「学生」は、具体的に誰なのか、どのくらいの教育レベルなのかを明確に情報を足して示す必要がある。ここで言う「彼女」は話者の隣人、「学生」は大学生とする。往々にして、このような発話 (「彼女は学生だよ」) は、話し手と聞き手の間で共有認識を持っている場合のみに発する。

2. 3 自由拡充 (rich enrichment)

自由拡充は、上述の飽和とは何らかの要素を補うことで意味を確定させ、理解しやすくなるという点では共通していると考えられる。東森・吉村 (2003:36) では、「表意」(本稿で言う「明意」) 形成過程において、発話の言語要素によって要求されるものを補うことを『飽和』と呼ぶのに対して、特定の言語要素の要求ではなく、もっと自由に語用論的に何らかの要素を補うことを、『自由拡充』(free enrichment) と言う」と両者の違いについて説明している。自由拡充の用例として、「彼、飲むよ」、「友だちと映画を見に行った」などが挙げられる。「彼は習慣的にお酒を飲んでいる」、「友だちと一緒に映画を見に行った」のように、下部部の表現が当該の発話において必ず必須とされるのではなく、発話の意味はコンテキストや言語知識から補完される。しかし、「どのくらい飲むか」、「どのような感じや気持ちで友だちと映画を見に行ったか」という言語要素の補完によって発話の意味を明確させることができることから、前述の「一義化」と「飽和」とは類似している。

2. 4 語彙概念の特定と拡張

語彙はある種概念が託されているコードであるため、概念は常に意味が明確に定められているものではなく、時には意味が曖昧になっているものがある。たとえば、「(パーティーの日程が決まって) どうしよう。着るものが全然ないわ」、「熱海は東京の西南100キロにある (今井ら2012:65)」のような表現では、「着るもの」の語彙概念を「一般的なお洋服」より「パーティーに相応しい服」まで狭めて特定して解釈するのに対し、「西南100キロ」の語彙概念を「100キロ」そのものではなく、交通手段にもよるが、車の場合は「108.1キロ」、新幹線の場合は「104.6キロ」まで拡張して解釈する必要がある。このような意味解釈は、アドホック概念 (ad hoc concept construction) と呼ばれている。

3. 曖昧さを生じさせる要因

意味の曖昧性を生じさせる主な要因として、主張や対立の回避という点が考えられる。近年の若者の心理的特徴について、米川（1996）は若者が他者と深く付き合わず、あまり関わろうとしないし、また自分が傷つけられるのを避けるために、他者に対する批判的なことばを言い換えて柔らかくしていると指摘している。しかし、これは近年の若者について言えるだけでなく、強いて言えば、日本人の心理的特徴であると筆者は考えている。許（2012）では、日常会話において、話し手が物事をはっきりと言い切るような表現より聞き手に判断や想像の余地を与え、自分の主張を抑え、相手との対立の恐れを避けようとする傾向が見られる。その他、断言の言い方より自分の主張や判断をぼやかす、たとえば「しかも見つけたとしてもなんか色がよくわかんない色してたりするから」「今いろんな選択肢があるじゃん？」の「なんか」、「じゃない」も同じような効果が発揮できると考えられる。

日常会話において、発話文を最後まで言わず、しばしば接続助詞「から、けど、のに」などで言い終わることが多い。これまでこれらは不完全文のように見えることから省略表現とされてきたが、談話文法の観点から話し手が会話のコンテキストに照らし合わせ、発話意味を十分に伝達していることから、「言いさし文」と見なされている（白川2009）。これらの表現は、特に話し手が自分の判断を示したり、相手に何らかの働きかけ（たとえば、依頼、要求、申し出）をする場合に用いられる。たとえば、次のような「言いさし」表現と呼ばれる会話例を見てみよう（許2010）。

(1) (CJ 中国人学習者, NS 日本語母語話者)

CJ: どのくらい 北京に

NS: 10日間 長いでしょう でも 遊びに行った
んだから いろんなところに

CJ: 中国語は 今はどう?

NS: 中国語は あんまり

CJ: 話せない?

NS: あんまり 困った 本当に 困った
勉強したんだけど

(2) 綾子: フレンチトーストにミルクティ

実: そんなもん食べっかよ

綾子: 栄養あるから

(3) 健一: このたびは、お世話になりました (一礼)

浜野: なんだ、その挨拶は。それじゃまるで
学生じゃないか (笑ってみせる)

大和田: まだまだ未熟者でございまして

上記のようないわゆる「言いさし」表現は、前述の通り、話し手が物事をはっきりと言い切るような表現（断言）より聞き手に判断や想像の余地を与え、自分の主張を抑え、相手との対立の恐れを避けようとするために用いられていると考える。「言いさし表現」は主節が現れず、従属句のみが現れるのが特徴的である。上記の例(1)～(3)の主節の意味をコンテキストに照らしながら、敢えて復元させると、大まかに「遊びに行ったんだから、(10日間ぐらいの長い日数がかかるんですよ)」(1)、「栄養あるから、([食べる]と病気が早く治るし、)ちゃんと食べてね」(2)、「まだまだ未熟者でございまして、(どうかご理解ください)」(3)というような意味が考えられる。(1)の相手の認識を改めること、(2)の相手の行動を要求すること、(3)の相手の理解を要求することの主節の部分を話し手ははっきりと言わずに、聞き手にコンテキストに基づいて判断や想像の余地を与え、話し手の発話意味を察知してもらう。日常会話において、話し手と聞き手の間で共有の認識（共有の基盤）を持っていないければ、「言いさし」表現の本来の話し手が伝えようとする発話意味がはっきりと理解できなくなる場合があるゆえに、曖昧に聞こえてしまうのである。

4. 「明意」「高次明意」「暗意」の互いの関係

4.1 「明意 (explicature)」

前述のように、日常のコミュニケーションで用いられる言語表現では、意味の確定度が不十分な表現の意味を確定させるために「発展 (development)」といった4つの語用論的手段（一義化、飽和、自由拡充、語彙概念の特定と拡張）が取られる。Sperber and Wilson (1986:182) では、「明意性 (explicitness)」を “An assumption communicated by an utterance *U* is explicit if and only if it is a development of a logical form encoded by *U*.” と説明し、発話によって明示的に伝達された想定を「明意 (explicature)」と呼んでいる。ここで言う「想定 (assumption)」とは、話し手の発話文（事柄に対する自分の判断など）そのものである。話し手の発話文を上述の「発展 (development)」といった4つの語用論的手段を用いることによって得られた明示的な伝達意味は明意というのである。

東森・吉村 (2003:47) の用例を用いて説明する

と、次のようになる。

(4) Bill: Did your son visit you at the weekend?

Mary (happily) : He did.

上記の (4) の Mary の発話「会いに来たよ」(“He did.”) は、「発展」の「自由拡充」という語用論的手段を用いて、発話意味をコンテキストに基づいた言語要素で補完させると、“Mary’s son (←He) visited her[Mary] at the weekend (←did).” という明意が得られる。

4. 2 「高次明意 (higher-level explicature)」

「明意」の段階でも聞き手が十分に話し手の発話意味を理解できるのであるが、話し手の発話態度を聞き手がある程度コンテキストから推測しなければならない。そこで、話し手の発話態度も十分に理解できるようにするには、「高次明意 (higher-level explicature)」のもう一つ段階が必要となってくる。「高次明意」の定義について、今井ら (2012: 73) は「表出命題を発話行為述語(「言う」「ささく」「どなる」など)や命題態度述語(「残念に思う」「滑稽だと考える」「～と信ずる」など)の目的節として埋め込むことにより得られるもの」と解釈している。今井らの述べている「表出命題」は本稿で言う「想定 (assumption)」, 言わば話し手の発話文と考えるものである。東森・吉村 (2003: 47) によると、「高次表意」(本稿で言う「高次明意」)を得る段階では、往々にして発話のコンテキストや共有認識をもとに聞き手が処理努力に見合うだけの認知効果を達成するのに、伝達意味を処理しているため、すべての「高次表意」(「高次明意」)が得られるわけではないという。前掲の例 (4) の Mary の発話は、次のような段階まで発展させれば、「高次表意」(「高次明意」)が得られる。

(5) a. Mary’s son visited her at the weekend.

b. Mary says that her son visited her at the weekend.

c. Mary believes that her son visited her at the weekend.

d. Mary is happy that her son visited her at the weekend.

上記の例 (5a) の復元された発話に b. の「メリーが言っている (Mary says that)」→ c. の「メリーが確信している (Mary believes that)」→ d. 「メリーが嬉しがっている (Mary is happy that)」といった順に話し手の発話行為や発話態度を表す述語を加えておくと、話し手の発話意味をより十分に、明確に理解できるようになる。しかし、発話解釈の過程では、上記の a. ~

d. のように、機械的にプロセスを経て意味を得ることはないだろうし、言語で明示的に表現されていない要素をコンテキストや共有認識に照らし合わせながら発話意味を推測することになる。

4. 3 「暗意 (implicature)」

Sperber and Wilson (1986:182) では、「暗意 (implicature)」を “Any assumption communicated, but not explicitly so, is implicitly communicated: it is an implicature.” と定義している。これは言わば、発話の文字通り以外の意味と考えればよいと思う。このような「暗意」は聞き手が様々な想定 (assumptions) から適当な発話の「暗意」を推論 (inference) することによって得られるものである。「暗意」を推論するには、2つの推論過程が考えられる。1つは演繹法 (the deductive method), もう1つは帰納法 (the inductive method) である。演繹は、与えられた命題から、論理的形式に頼って推論を重ねて結論を導き出す手法である。それに対し、帰納は、個々の具体的な事例から一般に通用するような原理・法則などを導き出す手法である。次の例 (6) の「暗意」は、演繹法で推論されたものである (許 2010: 174)。

(6) 兄：ゆうべも言ったけどな。一番人気はトーマーリって馬な

妹：1枠の2番でしょ

兄：そうそう

妹：わかってるって

例 (6) の引用助詞「って」は、話し手がなかなか納得してくれない相手に、「って」によって自分の考えを主張 (強調) して、相手を自分の考え方に引き寄せるように働きかける場合に用いられる。例 (6) の「わかってるって」は、聞き手が相手にこれ以上関わってほしくない、相手を早く突き放したいという意図を背後に、「これ以上何も言わないで」という「暗意」が捉えられる。このような「暗意」(推論の結論部分) は演繹法で推論されると考える。

前提：「通常は人のわかっていることをわざわざ言わない/言う必要はない」

現状：「妹がどの馬を買うかをわかっている」

↓

暗意：兄が何も言うことはない。

次の例 (7) [前掲の例 (3)] は、帰納法を用いた推論である。

(7) 健一：このたびは、お世話になりました (一礼)

浜野：なんだ、その挨拶は。それじゃまるで学

生じゃないか (笑ってみせる)

大和田: まだまだ未熟者でございまして

例 (7) の「まだまだ未熟者でございまして」の「て」は、浜野の「それじゃまるで学生じゃないか」という発話に対して理由説明を行うために用いられている。大和田の言わんとしている意味は「どうか大めに見てやってください」と相手の理解を求めていることと考えられる。

前提1: 「学生は、社会経験を持っていないため、社会的儀礼には不慣れである。」

前提2: 「学生は社会経験が少ないことから未熟の者と考えられる。」

前提3: 「未熟の者はこれから成長していくので、長年勤めの社会人と区別する必要がある。」

現状1: 「健一は社会人なのに、その振る舞いはまだ学生のように見える。」

現状2: 「健一は社会人としてまだ未熟の者である。」

↓

暗意: まだ未熟の健一を大めに見てやる必要がある。

「暗意」は演繹によって推論された「暗意」か、帰納によって推論された「暗意」に分けられると Sperber and Wilson (1986) は見なしている。しかし、「暗意」にも強弱という程度がある。この「暗意」の強弱は、はっきりとした基準を設けることは難しいと考えられるが、話し手の発話意味を理解できるまでに辿り着いたプロセスや情報量や推論の時間等の違いによるのかもしれない。

4. 4 「暗意」が得られるまでの推論時間

かつて、筆者は授業で実験的に発話の「暗意」を得るのにかかる推論の時間を計ってみた。協力者は大学院生15名である。実は、このような実験は既に認知心理学の分野でも行われたことがある。

筆者は大学院生に2つの会話を提示した。一応、会話状況についてある程度のことを各会話の前に説明し、話し手(筆者)と聞き手(大学院生)の間で共有認識を持つことを前提とした。流れとしては、筆者が発話し始めたら、学生がすぐタイマーを押して時間を計り始め、筆者の発話の「暗意」がわかったらすぐタイマーを止める。最初は、筆者が「既に連絡メールが来たと思うんですけど、もうすぐ9月4日に中間発表があるんですよ」と発話をしたとする。その結果として、ほぼ3分の2を超えた学生が2分ほどの時間で発話の「暗意」が捉えられた。多くの学生は、「中間発表があるから、前もって準備すること」と理解でき

た。次いで、筆者が「(夏休み中に論文相談を持ち込んで来た学生に) ○○さん、わたしも夏休みがほしいんだよ」と発話をした。その結果、「暗意」が捉えられるまでの推論時間は、ばらつきがあったものの、前回と大差はなかった。多くの学生は「論文を直すところが多い」などと解釈され、発話の「暗意」が正しく理解できなかったことがわかる。ここでは、発話の「暗意」は「○○さん、わたしも夏休みがほしいから、今夏休み中に論文の相談を持ち込まないでください」と意図されたものである。

上記のような小規模の実験は厳密に行われたものではないため、すべてを検証できたとは言えないが、発話意味の解釈過程において、「暗意」の強弱は、推論の時間だけで決まらず、様々な外的要素を考慮しなければならないことがわかる。日常会話では、すぐに意味がわかったと思っても、実は誤解だということもしばしばあるのである。

5. まとめ

これまで述べられてきたことを次のようにまとめる。本稿では、日常会話の用例を用いて意味確定不十分な表現、いわゆる曖昧表現の一つと言われている「言いさし」表現を認知語用論の関連性理論の観点から論じ、また「明意」「高次明意」「暗意」の互いの関係を明らかにした。

前掲の例 (1) ~ (3), (6) の発話の「明意」「高次明意」「暗意」を次のように「自由拡充」という語用論的手段(「発展」)を用いてそれぞれの発話意味が得られると考える。

(1) 発話

NS: 10日間 長いでしょう でも 遊びに行ったんだから いろんなところに

(1a) 明意

NSは北京でいろんなところに遊びに行ったんだから、旅行は10日間の長さがかかったのだ。

(1b) 高次明意

NSは満足げに北京でいろんなところに遊びに行ったんだから、旅行は10日間の長さがかかったと主張している。

(1c) 暗意

(ここでは特に暗意が捉えられるわけではないが、敢えて次のような暗意も考えられる。)

一般の3日間~5日間の北京旅行よりはずいぶん時間をかけて旅行できた。

(2) 発話

綾子：栄養あるから

(2a) 明意

綾子は、実の反論に対して、フレンチトーストとミルクティは栄養があると理由を説明している。

(2b) 高次明意

綾子は、実の反論に対して、フレンチトーストとミルクティは栄養があると苦心に説得している。

(2c) 暗意

綾子は実にフレンチトーストとミルクティを食べてほしい。

(3) 発話

大和田：まだまだ未熟者でございまして

(3a) 明意

大和田は健一のことをまだまだ未熟者であると説明している。

(3b) 高次明意

大和田は健一のことをまだまだ未熟者であると弁解している。

(3c) 暗意

大和田は浜野に健一をどうか大めに見てやってほしい。

(6) 発話

妹：わかってるって

(6a) 明意

妹は兄にどの馬を買うかをわかってると言っている。

(6b) 高次明意

妹は煩わしく兄にどの馬を買うかをわかってると再三主張している。

(6c) 暗意

妹は兄にわかっていることをこれ以上何も言わないでほしい。

例 (1) ~ (3), (6) を見ると、発話を高次明意まで発展させた段階で発話意味が明確に得られる場合も

あるため、すべての発話に必ずしも「暗意」が含まれるわけではない。日常会話では、「高次明意」の過程を経て「暗意」が捉えられるわけであるが、「高次明意」は会話のコンテキストと話者間の共有認識などをもとに想定して捉え、そして推論を用いて「暗意」を捉えることができるのである。

今後、会話研究のみでなく、認知語用論の語彙研究への応用も試みたい。

注

^{#1} Grice (1989:26) では、「協調の原理 (Cooperative Principle) を “Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.” (話し手は今行われている会話の方向や目的に矛盾しない形で言語伝達を行うこと) としている。

^{#2} 「飽和」と「自由拡充」は、東森・吉村 (2003) の用語である。

参考文献

- Grice, H.P. (1989) *Studies in the way of words*. Harvard.
- Sperber D. & Wilson D. (1986) *Relevance: Communication & Cognition*. 2nd edition. Blackwell Publishing.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう』岩波書房
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』研究社
- 許夏玲 (2010) 『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』白帝社
- 許夏玲 (2012) 「日常会話における『曖昧表現』の使用実態」『第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集』ココ出版. pp.445-454
- 米川明彦 (1996) 『現代若者ことば考』丸善ライブラリー

認知語用論の観点から見る日本語の曖昧表現の意味解釈の過程

—— 関連性理論に基づいて ——

On the Process of Meaning Interpretation of the Japanese Ambiguous Expressions:

Based on the Relevance Theory

許 夏 玲*

Harling HUI

留学生センター

Abstract

In this paper, I examine the so-called Japanese ambiguous expressions in daily conversation, which are defined as the underdeterminacy from the viewpoint of the relevance theory, and try to clarify how explicature, higher-level explicature and implicature are closely related in the process of meaning interpretation of an utterance.

Keywords: underdeterminacy, ellipsis, cognitive pragmatics, higher-level explicature, implicature

International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿では、日常会話の用例を用いて意味確定不十分な表現、いわゆる曖昧表現の一つと言われている「言いさし表現」を認知語用論の関連性理論の観点から論じ、また「明意」「高次明意」「暗意」の互いの関係を明らかにすることを試みる。

キーワード: 意味確定不十分な表現、言いさし表現、認知語用論、高次明意、暗意

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)